「長崎の西洋医学」

本会理事　福沢道夫

１、出島からもたらされた西洋医学

西洋医学が初めて日本に伝来したのは、カトリックの宣教師による南蛮医学だった。

しかし、江戸幕府のキリスト教禁令以後は、南蛮医学に代わり出島のオランダ商館医から紅毛医学（阿蘭陀医学）がもたらされた。

当時の日本の医療は、中国から伝わった漢方医学が中心であった。医師たちは西洋医学が伝来すると、漢方医学にない生薬や刀傷に有効な外科治療に注目した。

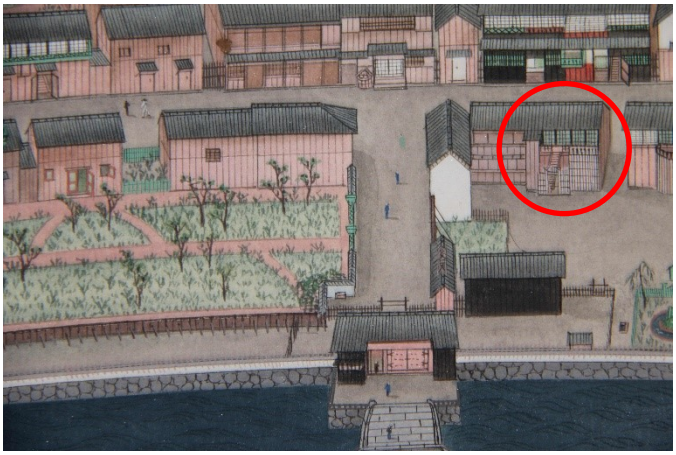
江戸時代初期、幕府はオランダ商館医カスパル・シャンベルゲルに命じ、長崎や江戸で日本人医師たちに紅毛外科を伝授させた。また、儒学者で儒医の向井元升は、大目付井上筑後守の命で長崎に赴き、商館医ハンス・ユリアン・ハンケに外科の医療技術と薬の調合法を伝授された。紅毛医学を漢方医学の知識で解釈して医書にまとめ、『阿蘭陀外科良方』として今に残る。

長崎にはオランダ船によって多様な医薬品や蘭訳医学書がもたらされ、阿蘭陀通詞により翻訳された。

１７世紀中期から１８世紀初頭、西洋解剖学の知識を広めた本木良意、商館医から外科を学んで『紅夷外科宗伝』を著した楢林鎮山らの活躍は、多くの日本人医師が西洋医学を知る基となった。

天和年間（１６８１～１６８４）に本木良意により翻訳された解剖書は、杉田玄白の『解体新書』に遡ること１００年程前のことであった。医学を始めとする蘭学は長崎で誕生し、成熟した後に江戸をはじめ日本各地に広まった。

１８世紀末、ツュンベリーらの商館医に学び、多くの弟子を育てた吉雄耕牛は、ツュンベリーから梅毒治療薬の「水銀水」を伝授される。その高い治療効果は、人々の蘭学への関心を高める一因となった。



出島外料（外科）部屋　【○部分】

川原慶賀「出島図」（部分）ライデン国立民族学博物館蔵

（注）原田会長によると、江戸時代、外科は外料(がいりょう)と書かれていたということである。

文政６年（１８２３）に商館医として来日したフィリップ・フォン・シーボルトは外科と産科に優れ、牛痘法や梅毒治療などの最新の医薬情報をもたらした。

シーボルトは、出島での診療の他、吉雄邸や楢林邸での診療が許され、そこでは講義や外科手術も行った。

翌年には鳴滝塾を開設、全国から集まる多くの門下生を指導育成した。

江戸時代、天然痘は日本各地で度々流行した。嘉永元年（１８４８）商館医として来日したオットー・モーニッケは、佐賀藩医の楢林宗建と協力し、日本で初めて牛痘接種に成功した。牛痘は子供の腕から腕へと植え継がれ、長崎から大阪や江戸の蘭学者を経て全国へと広まった。

２、近代的西洋医学への発展

安政４年（１８５７）第二次長崎海軍伝習の軍医としてポンペ・ファン・メールデルフォールトが来日し、松本良順ら全国から集まった医学生に対し、日本で初めての人体解剖実習を行うなど、近代的西洋医学の教育を行った。また、コレラの流行時には治療にあたり、治療法を広めた。

文久元年（１８６１）小島郷佐古（現在の西小島）に西洋式病院の小島養生所と医学所が開設された。文久２年（１８６２）ポンペが帰国すると、後任としてアントニウス・ボードウィンが来日し、医学と基礎科学の充実に努めた。

慶応元年（１８６５）ボードウィンは化学と物理学の専門教官としてクーンラート・ハラタマを招き分析窮理所を設立した。慶応２年（１８６６）養生所と医学所が統合され精得館と改称された後は、コンスタント・ゲオルグ・ファン・マンスフェルトに引き継がれた。明治元年（１８６８）精得館は、長崎府医学校と改称され、その後幾多の変遷を経て長崎大学医学部として今日に至る。

長崎でポンペらに学んだ人々は松本良順の他、佐藤尚中、緒方惟準、長与専斎、吉田健康など多数にのぼった。彼らは、明治維新後に各地に設立された医学校で医学教育にあたった。

こうして長崎から始まった近代的西洋医学は日本各地に広がっていった。

本稿は令和５年９月例会の発表の要旨である。

参考資料

相川忠臣『出島の医学』長崎文献社　２０１２年
新村　拓『日本医療史』吉川弘文館　２００６年
大島明秀『蘭学の九州』弦書房　２０２２年